

〔中国陶磁展によせて〕

越州窯青磁について

碧玉の色を目指したと言われる青磁は後漢時代に美しい色彩を得て以降、元時代に青花が完成されるまでの長い間、中国陶磁史の本流だったといえます。その中心となった越州窯は、耀州窯、龍泉窯、汝窯、定窯など広範囲にわたる多くの窯の製陶に影響を与え、ともに、白磁の完成にもつながりました。さらに、青磁は青花とともに中国に端緒が求められ、国内のみならずアジア圏内や欧州までも広くもたらされた、国際的な性格を持った陶磁器といえます。黒釉磁や白磁、五彩なども海外へ渡っていますが、中国陶磁が海外に広がる画期といえる唐時代後期に越州窯青磁がその重要な位置を占めていたことは、福岡県の鴻臚館址遺跡やエジプトのフスタート遺跡、朝鮮半島からの出土品などからも明らかです。

やや遡れば、青磁四耳壺(展覧案内の下図参照、大和文華館蔵)は法隆寺伝来の青磁四耳壺(重要文化財、東京国立博物館蔵)に類すると見られる作品です。法隆

寺伝来品は、『法隆寺伽藍縁起流記資財帳』の記載から天平六年(734)に光明皇后が法隆寺に「丁子香」を奉納する際に用いられたと考えられる壺で、胴下部までやや緑みの強い青磁釉が掛かり、胴裾には赤褐色の胎土が見られます。この作品は中国南部の浙江省あるいは福建省辺りの窯で制作された越州窯系青磁で、恐らく遣唐使によってもたらされたと考えられています。

このように中国から周辺諸国へは遣唐使や朝貢の際に陶磁器が請求された可能性もありますが、貿易の対象になることによって大量の陶磁器が広範囲に移動するようになっていきます。ここでは、越州窯青磁の国内における流通の一端を墳墓や塔への奉納品から見ていきます。

越州窯は現在の浙江省北部を中心とした多数の窯を指し、同系統の青磁(越州窯系青磁)を焼成した窯を含めると更に範囲は広がり、浙江省南部の温州市にある甌窯や金華市の婺州窯も広義の越州窯系に入ります。その中で、唐時代末から北宋時代にかけて秘色と称された貢納品や王族の為の器など作行きの良い精品を焼造した窯は杭州湾沿いの地域に集中し、慈溪市の上林湖窯址、寺龍口窯址、開刀山窯址、上虞市の窯寺前窯址、寧波市の東錢湖周辺の窯址などが挙げられます(図1)。

十世紀に入ると越州窯は呉越国の領土内に入り、王族である銭氏の墓には越州窯青磁が納められました。銭寛及び水邱氏(初代国王銭鏐の父母、900・901年埋葬)、第二代国王銭元

瑾及びその後妃である馬氏と呉漢月、銭元玩(銭元瑾の弟)の墓からは褐彩文様や、陰刻文或いは浮き彫り文が施された越州窯青磁が出土し、当時の最高水準がうかがえます(図2)。盗掘されているものも多く、出土品を奉納品の全てと見ることはできませんが、銭寛・水邱氏墓からは、「官」字銘や鍍金銀扣(鍍金した銀板を器物の口や縁、畳付に貼り付けること)が施された定窯白磁も多数出土しているように、興味深いことに、これらの墓の多くからは青磁とともに定窯の白磁が発見されています。

また歴史史料などからは、金銀が施された器を含めて大量の越州窯青磁が呉越国から北宋へ貢納されたことが知られています。北宋では各地の窯から陶磁器が貢納され、磁器庫に納められていました。また、北宋の宮廷で定窯の器の使用をやめて汝窯の青磁を用いた、とする記述もあり(「本朝以定州白磁有芒不堪用、遂命汝州燒青窯器、故河北唐・鄧・耀州悉有之、汝窯為魁。」『坦齋筆衡』宋・葉寘)、定窯白磁と汝窯の青磁が宮廷で用いられていたことがわかります。しかし、北宋初期には越州窯青磁はまだ宮廷で重んじられていました。呉越国が北宋に降った後、太宗の治世である太平興国七年(982)には越州窯の管理官の官職があり(「太平興国七年歲壬午六月望日、殿前承旨監越州瓷窰務趙仁濟濟…」『志雅堂雜鈔』宋・周密)、また、太宗の元徳皇后陵(977年没、1000年埋葬)からは、3件の越州窯青磁と37件の定窯白磁が出土しています。白磁に比べて青磁の数は少ないものの、龍文が刻まれた盤や鶴や蝶文が線刻された盒の質は高く、盒の文様(図3)は慈溪市上林湖の窯の一つである黄繕山窯址出土の合子に近く(図4)、北宋初期に見られる複雑で装飾性

の高い表現になっています。呉越国の王族や北宋初期の宮廷など、越州窯青磁は為政者との深い関わりにより発展した一面があり、北宋時代に官廷で用いられた定窯白磁との共通性が認められます。

越州窯青磁と定窯白磁は唐時代には南北で対比して賞賛されました。北宋時代には多くの民窯が活発になり、多様な陶磁器が焼成されますが、出土品の組み合わせからは、王族や貴族など上層に属する人々が当時の最高の陶磁器を納めようという意図と、越州窯青磁と定窯白磁がそれに値するものとして認識されていたことがわかります。奉納品について共通する認識があったのか、南唐二陵(943年没の李昇・961年没の李璟墓)でも精粗を取り混ぜながら青磁と白磁が副葬され(越州窯青磁1点を含む)、また、河北省定州の静志寺舍利塔地宮(977年再建)から越州窯系の文様が施された定窯白磁と北方青磁である耀州窯の青磁が発見されており(その他越州窯青磁と見られる1点と定窯三彩数点も出土)、ここでも白磁と青磁という組み合わせが見られます。

また北方では、遼墓からも越州窯青磁は出土しており、遼の漢族官僚であった韓佚の墓(995年没)からは白磁と共に越州窯青磁の水注が出土し、器面には細い線で人物文が刻まれます。明州(寧波)には越州窯青磁の運搬にも利用された港があり、和義路遺址からやはり同様の水注が出土しており(寧波博物館蔵)、これは形状や装飾文様、技法が大阪市立東洋陶磁美術館所蔵の青磁劃花鸞鶯文水注(図5、特別出陳作品)と酷似します。

越州窯青磁の世界的な需要と供給は主に海上交通の発達と活発な貿易活動により支えられ、その背景には中国の製陶技術の成熟によって生み出された洗練されたやきものと、これに対する憧れがあったからこそ成り立った構造といえます。

(瀧朝子)

※図2は臨安市文物館『物華天宝 呉越国出土文物精粹』文物出版社、2010年、図3は李軍編著『千峰翠色』寧波出版社2011年、図4は金祖明「浙江余姚姚青瓷窯址調査報告」『考古学報』1959年第3期より転載させていただきました。

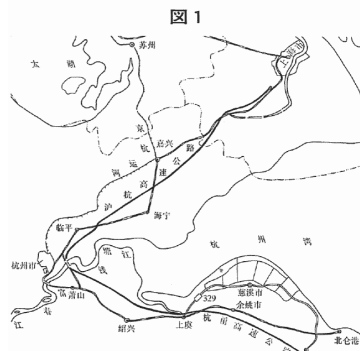
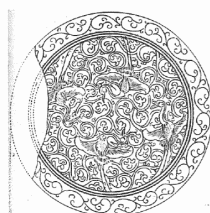


図1

水邱氏墓出土
越州窯青磁元徳皇后陵出土
青磁劃花鸞鶯文套盒(部分)

黄繕山窯址出土青磁盒

青磁劃花鸞鶯文水注
大阪市立東洋陶磁美術館所蔵

季刊 美のたより No.182

平成25年4月5日

発行 大和文華館